実践事例　小学校３年

道徳の時間で活用する
～親切、思いやり～

萩市立明倫小学校　木村　春美

1　本場面におけるポイント

● **情報機器について知る。**

事前アンケートや導入の工夫により、スマートフォンやパソコンなど、情報機器の実態をつかむことができる。

● **相手のことを思って伝えることの大切さに気付く。**

相手を思う内容の手紙を教材に使用することにより、直接目の前にいない対象に対しても、心を寄せ、気を配ることの大切さをつかむことができる。

● **情報機器を使うときに気を付けることが分かる。**

「私たちの道徳」を事前・事後の学級活動等で活用することで、本時の道徳では十分に指導できない「知恵を磨く領域」を補充することができる。

2　授業の実際

１　主題名　相手のことを思って～松陰の母～

「山口県　３年生の道徳」ぶんけい

２　ねらい

松陰の母たきの手紙を読む松陰先生の姿を通して、相手を思いながら行動する態度を養う。

３　展開

（１）導入　事前アンケート結果から

教師：「15」この数字の意味が分かりますか。
Ａ児：「なんだろう。」
教師：「このクラスで、自分の携帯電話やスマートフォンをもっている人の数です。」
Ｂ児：「多いなあ。」
教師：「16」この数字の意味は分かりますか。これは、メールをしたことがある人の数です。」

□　指導上の留意点等

道徳の時間までに、「私たちの道徳」の『じょうほうモラル』P171を読んでおくように指示する。また、事前に携帯電話の所有数や使用経験数をアンケートで把握しておく。自分用の携帯電話所有率が48％と予想以上に高いことが分かった。

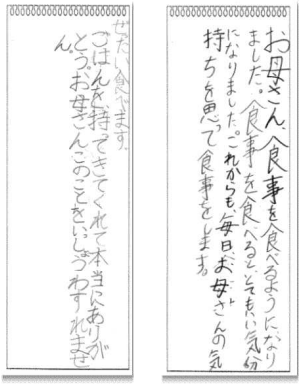
児童の興味本位ではなく、情報機器に対して正しい知識を身に付けるとともに、目に見えない相手を思いながら使用することの大切さを実感させることが必要である。

（２）展開（前段）　相手のことを思って手紙を書く

教師：「母たきが松陰先生にあてた手紙を読んで考えてみよう。」
「目の前にはいないけれど、お母さんは、どんな思いで松陰先生に手紙を書

いたのだろう。」
A児：「松陰先生のことを大事に思っていると思います。」
B児：「食べ物を食べて元気になってもらいたいと思っていると思います。」
教師：「母たきの気持ちが分かった松陰先生が、母にどんな返事を送るか、母、たきの顔を思い浮かべながら書いてごらん。」
児童：学習プリントに返事を書く。

□　指導上の留意点等



展開の前段では、情報モラル教育の「心を磨く領域」を意識した流れにする。

特に、母たきの手紙を読む松陰先生が、目の前に母はいないけれども、文面から母の思いがひしひしと感じ取れること、そして、母の思いに心打たれたことを感じ取らせたい。

このことは、メールやチャット等のSNS活用の際には、目の前にはいないけれども相手の立場に立った文章を作り、送信しなければならないことの大切さにつながってくる。

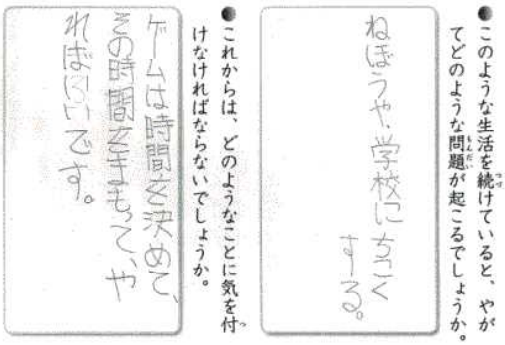
（３）展開（後段）　メールやラインの実際

教師：「メールやラインをするときに気を付けることは何だろう。」
A児：「相手のことを考えます。」
B児：「優しい言葉を使います。」
教師：「メールやラインは相手が見えないので、丁寧な言葉で文章を作りましょう。読む人によって意味を間違ってとらえられることもあります。また、返事を期待したり急がせたりしません。」

□　指導上の留意点等

展開の後段では、情報モラル教育の「知恵を磨く領域」を意識した流れにする。ただし、道徳でこの領域を扱うことは難しい。情報機器やメール、ラインなどの実際を教え、知識化させることが主体になるからだ。そこで、後段では深入りせず、後日特別活動の時間を使い『私たちの道徳』170ページを活用し、「知恵を磨く領域」を押さえることとしたい。

本時の終末は、松陰先生の「親思う　心にまさる親心　今日のおとずれ　何と聞くらん」を引用した。

3　実践を振り返って

『私たちの道徳』の「じょうほうモラル」の章は、高学年になるにつれて発展して編集されている。特に、生活のリズムを崩す恐れがあることに重点が置かれているため、学級活動等で活用することが望ましいように思われる。心を育て、相手のことを思いやる心情を育てるには、道徳の授業で計画的に取り上げていく必要がある。そして、その際には、「じょうほうモラル」を意識した展開を心がける必要がある。